

あなたの生活に文学を

阿部 公彦

今月は崔美さんの「pray human」(群像 3月号)に圧倒されました。ストーリーの面白さや細かい表現の卓抜さというより、とにかく声に力がある。「ジニのパズル」でデビューした崔さんはまだこれで2作品目ですが、前作にもあつた魅力はさらに増えています。その源は何か。

声の力

小説とは部屋のようなものではないでしょうか。その空間感覚は作品によって異なる。息が詰まりそうな狭い部屋。がらんと寂しい部屋。見晴らしのいい部屋。読者はそこに滞在し、雰囲気は慣れ、空気を呼吸する。立ち去った後も、そこで経験した匂いやまぶしさを思い出す。小説とは居心地を素材にした芸術だとも言えるでしょう。もちろんその根は、日本語や英語などそれぞれの言語固有の感覚にもある。

しかし、崔さんの作品の強烈さは、この空間の不安定さや歪みから生まれているように私は感じました。すべしで話しているのに、まるで遠くに呼びかけるような調子がある。新

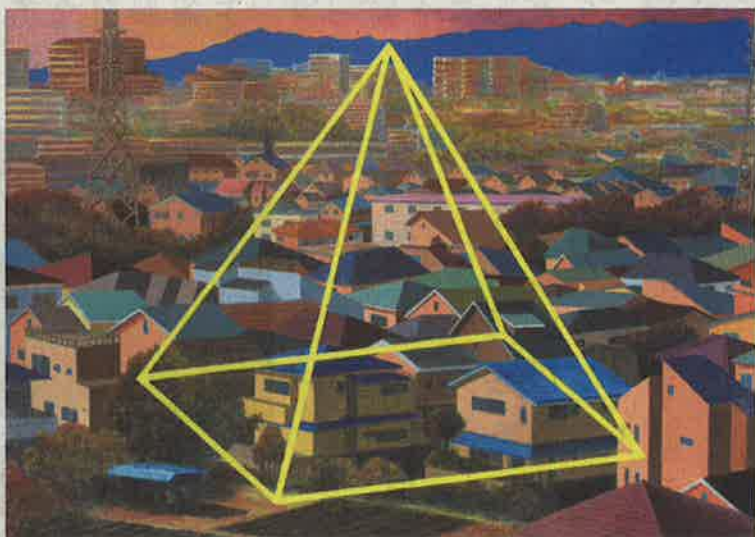
死に込められた唐突

しく登場する人物が、手続く唐突です。いつ、割り込んできて急ぎに間に合ってしまうか分からない。現する。かと思つと、突如、いなくなる。いきなり作家です。一つだけ注文を耳元で囁かれるセリフの、ずかすか入ってくるような侵入感も強烈です。やさしい言葉も、どぎつい言葉もある。白血病で死んでいく「安城さん」とのやりとりは壮絶です。

遠くの世界

精神科病院で知り合った患者たちのかかわりをバツクに「私」自身のトラウマも明かされるといのが大筋です。どの患者にも濃厚に死の影が差す。しか厚に死の影が差す。しかし、死は運命の果てに練名子」との視点から描く作品なものと来るのではな

崔美「pray human」



絵・片山高志

未名子は、次々に沖繩を襲う台風を背景に、殻にこもるような閉塞を生き延びていくが、あるとき、ネット上で「遠方にいる登録者にクイズを読み、答えさせる」というあやしげな仕事を見つけた。

追悼文

ここから、ごこの国の人間か分からない人たちとの交流が始まり、遠くの世界が視界に入る。そんな中、彼女の家の庭にいたいむ。困った未名子に彼らはさまざまなお話をします。動物は沖繩在来の「宮古馬」。未名子は「ヒコキ」を自任した坪内さん(平山周吉)「新潮」3月号)ならど

1月13日、坪内祐三さんご逝去。各誌の追悼文を読みながら、「追悼文マニア」を自任した坪内さん(平山周吉)「新潮」3月号)ならど

にまたがり、みずから情報の収集者となる覚悟を決めます。極小の空間や人間関係に閉じていることで、逆に徹底した情報の記録者となるのです。小説家としてのマニフェストとも読める作品でした。

藤野可織さん「人を幸せにする仕事」(同)は、社会から押し付けられる「文才学」イメージに違和感を抱く作家が主人公。得も言われぬイヤな感じを、それとわからない静けさとも表現するのは文学の大事なこと。藤野さん、実にうまい。国語の教科書に採用したいほどです。罵倒表現

「英米文学者」 随時掲載